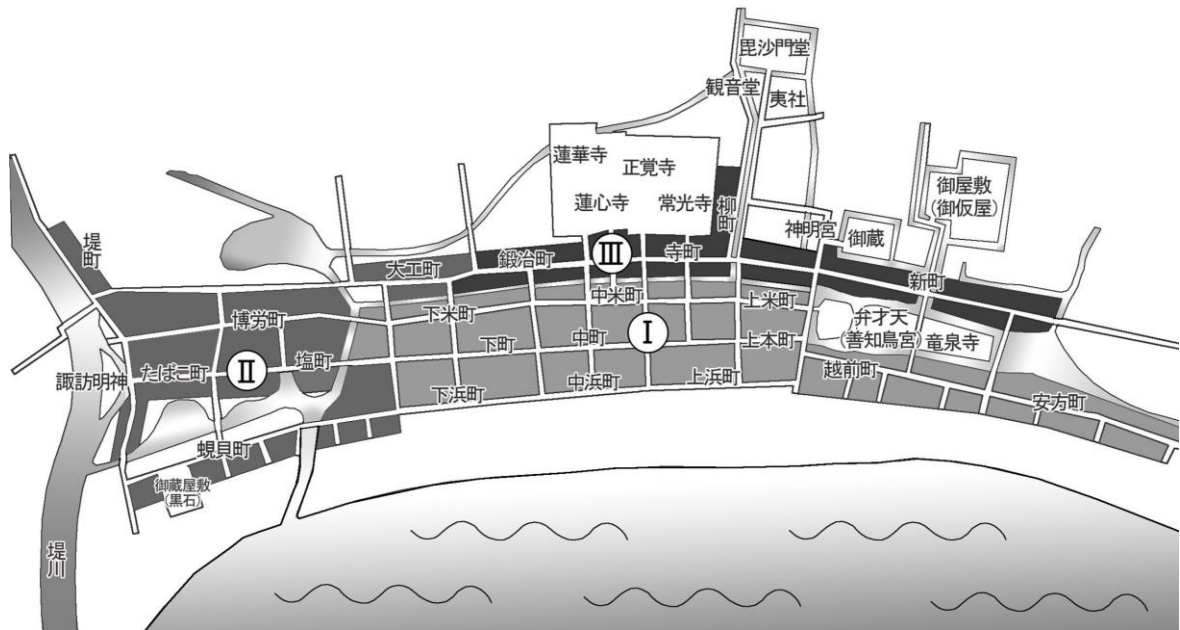


こんにちは！ 室長の工藤です。

今回は、藩政時代の青森町の人口動態について紹介します。まず、藩政時代の青森町の範囲は、東は堤川、西は古川村（村境は特定できません）を境とし、南は概ね駅前通り、北は青森警察署の南側までとなっていました。弘前藩がここに新しい町づくりを始め、完成したのが寛文11年（1671）頃です。それから13年経った貞享元年（1684）には、青森町の戸数は898軒であったことが知られています。試みに、幕末期の1戸当たりの平均人数4.9人をこれにあてはめてみると、総人口は4,400人と推計されます。これが、青森町誕生間もない頃の人口とひとまずは考えておきましょう。



町づくりの3段階

それから約170年後、幕末の嘉永6年（1853）になると、青森町の総人口は8,087人と貞享元年の約1.8倍となり、慶応元年（1865）にはついに10,000人を超える人口を抱えることになりました。

また、私の手元に嘉永6年から文久2年（1862）までの10年間の人口データがあります。このデータは、青森町を大町・米町・浜町・新町・博労町・安方町・蛸貝町・大工町の8つのブロックに分け、それぞれの人口や戸数を書き上げたものです。データによれば、この10年間の青森町の人口は年平均1パーセントの増加率で推移しています。このうち、8つのブロックで平均値を上回るのは、大町と米町の2パーセント、そして突出しているのが町の北西沿岸部にある安方町の4パーセントです。

青森町では、荷役労働をはじめ湊の港湾・商業機能を支える労働力として日雇層が多く、慶応3年のデータでは全戸数の18パーセントが日雇層で、もっとも比率の高い職種となっています。しかも、安方町はこうした日雇層の占める割合が高かったといわれています。さらに、安政2年（1855）の箱館開港に伴い、蝦夷島（現北海道）では従来からの漁場での労働力のほかに、箱館やその周辺での奉公人としての労働力需要が増大していたといえます。そして、こうした労働力として弘前藩領から人が移動するとき、渡海地の一つである青森町が一旦彼らを労働力として引き受けたケースがありました。

町	役	御役諸工	御役家業	無	役	家	業	内々諸工	内々家業						
町年寄	2	大工	48	造酒	12	町年寄物書	1	古鉄物	1	水売小売	9	大工	4	蕎麦切	2
御印書	2	船大工	7	質座	6	名主物書	1	古物売	6	浜丁持	27	船大工	3	仕裁屋	2
御給人	25	木挽	17	鱒網師	1	黒石蔵元	1	長崎俵物問屋	1	船水主	54	桶屋	2		
名主	8	左官	8	仕裁屋	1	医業	25	岡問屋	1	鍛冶通弟子	2	提灯張	2		
御用達	2	鍛冶	38	室	13	座頭年行事	1	八百屋	8	日雇	419	木挽	2		
月行事	23	豊刺	10	魚売小頭	2	按摩取	8	青物店	32	紙漉	1	左官	2		
五人組	59	経師	3	魚売	50	御蔵守	4	煙草切	10	洗濯師	79	下駄打	1		
御船頭	4	塗師	4	造醬油	4	杉守	1	鍋受売	2	廓屋	11				
升取	2	石切	5	造酢	5	手習師匠	2	煮売	6	諸家様下宿					
御蔵并頭	2	金具師	1	小売酒	4	目明	1	漁師	206	菓子杜氏	2				
御蔵巻頭	2	鋳物師	1	絞油	7	糺米取扱	2	薬缶直	3	船小宿	7				
御蔵巻	10	指物師	9	干肴	53	灸治	1	髪附	5	一文商	22				
水夫	12	松物師	10	菓子	9	船問屋	21	白酒	13	駅場小走	2				
		提灯張	7	焼麩	1	米金仲買	11	米籠拵	2	館触売	5				
		下駄打	9	麵類	5	小出仲買	5	籠組	4	定宿	4				
		桶屋	37	魚触売	95	旅籠屋	1	取売	34	御国産漆取次	1				
		附木突	5	豆腐	25	往来宿	1	館屋	37	芝居守	1				
		唐箕大工	1	染屋	7	旅人宿	1	蠟燭懸	2	筆師	2				
		鞍差	1	蠟燭	15	風呂屋	11	雑菓子	23	上絵師	2				
				鳥取	2	髪結	28	酒杜氏	7	在商人	6				
				馬屋	3	米屋	58	醤油杜氏	1	紅屋	2				
				蕎麦切	13	米問屋	4	町料理	4	作花	2				
				油波	2	薬種屋	2	土細工	1	桶拵寄	1				
						造味噌	12	瀬戸白継	3	合羽傘仕直	2				
						農業	125	通奉公	33	種物売	3				
						絹布	1	馬宿	9	奉公人口入宿	2				
						木綿	31	芝居内茶屋	3	箕作	1				
						古手	21	馬匠	63	納豆屋	1				
						小間物	51	馬噴	3	合薬取次	11				
						着物	210	魚油小売	9						

慶応3年の青森町職業別軒数  
 (『新青森市史』資料編4より)

つまり、安方町の際立った人口増の理由は、こうした移動する一時的な労働力を日雇層として吸収していたからではないでしょうか。また、逆の見方をすれば、青森町はこうした労働力を吸引できるほど発展していた「港湾都市」といえると思うのです。